連載〈まつやま　人・彩時記〉㉕

自由律俳句の灯をかかげ若くして逝った天才俳人　野村朱燐洞

元松山市素鵞小学校長
伊予史談会会員　上岡　治郎

俳句に熱中しはじめた頃の野村朱燐洞
数え年18歳（明治43.7.31写）

一、野村朱燐洞を知る

私が素鵞小学校に赴任して来た昭和五十六年の一学期。ある児童の家庭訪問をしての帰り道、「おや、こんな所にお寺がある。」と何気なく立ち寄ったのが小坂二丁目の多聞院でした。

そして、その寺の山門を入るとすぐの右手に、**野村朱燐洞の句碑**が建っているのを見つけた私は、早速にその句をノートに書き留めたのです。

倉のひまより見ゆ山夕月が

（大正二年五月、朱燐洞二十一歳の句）

そして私は、その夜、鶴村松一氏の『**伊予路の野村朱燐洞**』という小冊子を開いて、早速に「野村朱燐洞」の勉強に取りかかりました。

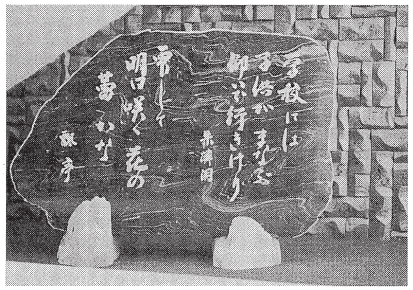
その著書によれば、野村朱燐洞（本名・野村守隣）は、明治二十六年十一月二十六日、父徳貴、母キヌの二男として、温泉郡素鵞村大字小坂八十一番戸（現在の松山市小坂二丁目一）に生まれ三歳まで在村。（その後、現在の錦町、次に東雲町に転居する）

そして、少年時代より文学を愛し、明治三十九年三月松山高等小学校卒業後は温泉郡役所の給仕をしながら松山夜学校（現在の城南高校）に学び、十九歳で自由律俳句結社「十六夜吟社」を結成主宰し、二十歳で海南新聞俳壇の選者となり、二十三歳で荻原井泉水の主宰する「層雲」の選者となる。

多聞院に建つ朱燐洞の句碑。昭和54.10.31建立。発起者・鶴村松一氏、石材寄贈者・藤平長久氏

二、学校教育にどう生かすか

こうして校区出身の野村朱燐洞の研究を始めた私は、同じく校区出身で正岡子規と親友である五百木飄亭の研究も始め、体育館改築を記念に句碑を建立したのである。



素鵞小体育館に建つ飄亭・朱燐洞の句碑
（昭和61.3建立）

学校には子供がまなぶ　仰いで行きけり

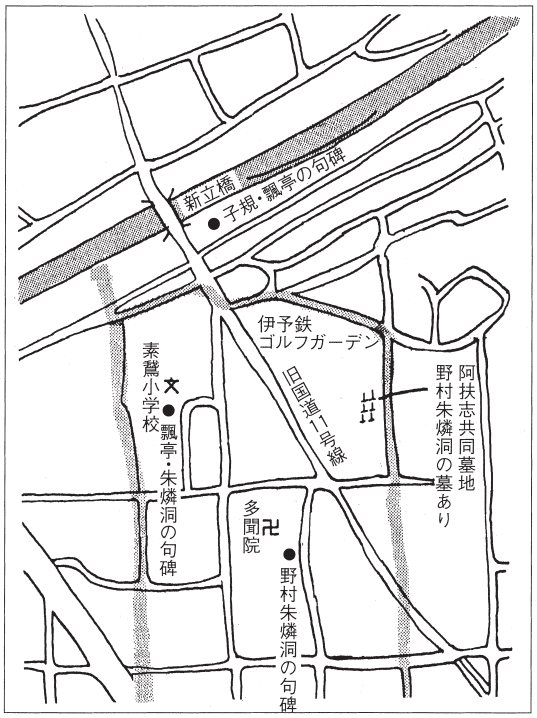
●朱燐洞の句は大正七年四月の作で、学校の前を通る時、朱燐洞は必ず足を止め、学校に向かって深々と一礼をした後、大きな声でこの句を朗唱したというのである。

教育の道を大切に思う朱燐洞のこの気持ちを、子供たちにも知らせたいものである。

雫して明日咲く花の蕾かな

●飄亭の句は、「飄亭句集」に載っていたもので、明日開花する花に想いを馳せる飄亭の気持ちがよく出ていると思う。

そして私は教師の立場から、この蕾を素鵞小学校の子供たちと考え、その成長に期待したいのである。



「小坂」の地図　（阿扶志共同墓地・朱燐洞の墓　多聞院・朱燐洞の句碑）

三、自由律俳句と朱燐洞

明治43・秋　河東碧梧桐が帰松して、松山俳句倶楽部結成。この時、朱燐洞は初めて碧梧桐に会う。

明治44・3・15　俳句の号を朱燐洞と改称する。（十九歳）

四月に荻原井泉水が俳誌「層雲」を創刊、朱燐洞これに参加する。

5・16　俳句結社「十六夜吟社」を結成する。参加者十五名。（この日から朱燐洞は温泉郡水利組合書記となり月俸八円）

明治45（大正元年）

二月から海南新聞俳句欄選者となる。住所は東雲町十四番地となる。

森田雷死久に師事する。

大正2・6　水利組合書記となり月俸十円。中央の文芸雑誌「文章世界」に俳句を投稿多数入選。

大正3・2　県外の自由律俳人種田山頭火など数名が十六夜吟社に寄稿してくる。

6・7　清平社同人と松山七か寺順礼に参加。

11・1　荻原井泉水を迎え十六夜吟社主催の俳句大会を萱町公会堂で開く。参加者約六十名。

大正4・1・2　三姉リウ死去享年三十一歳。十月「層雲松山支部」を創立、加盟者十五名、事務所十六夜吟社朱燐洞宅とする。（二十三歳）

大正5・4　層雲松山支部機関紙「瀬戸うち」を発刊。同人二十五人となる。この頃から蓄膿症・頭痛になやまされる。層雲選者となる。

大正6・1　入院、鼻手術、二月再手術。六月温泉郡役所書記に登用され月俸十三円。

この年から高浜虚子が自由律俳句を批判し、十二月、海南新聞は「俳諧を芭蕉、蕪村、子規の正道に復せ」と社告して松根東洋城門の織田氏に俳句選者を委嘱。

大正7・4　温泉郡役所書記、月俸九級十七円、初めて「愛媛県職員録」に記載される。

八月石鎚登山、面河渓探勝。

十月、世界的に流行したスペイン風邪、流行性感冒にかかり、脳膜炎を併発、三十一日午前四時、小唐人町の自宅で死去。（享年二十六歳）

翌十一月一日、門下生高木和蕾・高島紅映々らと役所の同僚数名によって葬儀が営まれる。松山市小坂町一丁目の阿扶志（あぶし）共同墓地に埋葬、法号本覚院守隣弘照居士。

11・23　十六夜吟社森南川主催で東雲町三宝寺で朱燐洞追悼句会が開催された。父徳貴、大分市の次姉ノブのもとに引き取られた。

大正8・5　野村朱燐洞の遺稿句集「禮讃」が、荻原井泉水によって層雲より刊行された。

大正10・1・18　父徳貴、大分市の次姉ノブの婚家先で死去。享年六十九歳。

昭和5・8　朱燐洞の墓（先祖代々墓）が次姉ノブによって小坂町の阿扶志共同墓地、野村家の墓域に建てられる。

昭和6・11・13　次姉的石ノブ死去。享年五十一歳。

昭和14・10・1　種田山頭火、朱燐洞を慕って来松、十月五日夜、高橋一洵・藤岡政一の案内で墓参。

12・6　山頭火が一草庵に居住し、十六夜吟社を復活する。

昭和15・10・1　未明、種田山頭火一草庵で死去。享年五十九歳。

昭和26・9・26　層雲同人来松して十六夜吟社を「十六夜社」と名づけて再復活し、代表は高橋一洵。

10・31　朱燐洞三十四周忌を石手地蔵院で行う。

昭和30・10・30　井泉水発行の「層雲の道」と題するパンフレットに朱燐洞・尾崎放哉・大橋裸木・種田山頭火の四名を層雲の代表作家として取り上げている。

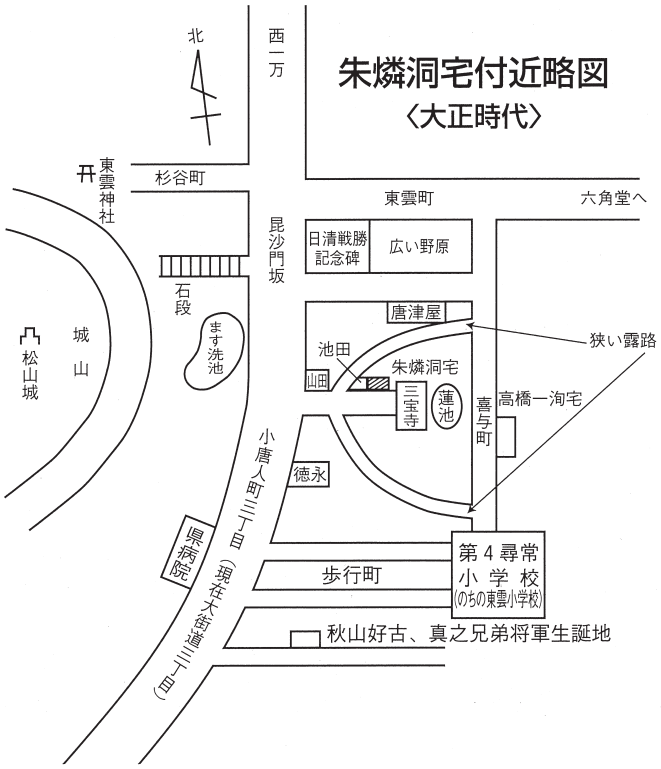
昭和36・10　阿部里雪が自宅に朱燐洞の句碑建立。

「足袋濯げば干すほどの日ざし来ぬ」

昭和50・3　三月より朱燐洞の門下森南川によって、回想記が俳誌「いたどり」に昭和五十二年七月まで七回にわたって連載発表された。

昭和52・10・16　朱燐洞六十回忌が高橋一洵宅において行われた。

昭和52・11・9　朱燐洞の句碑**「風ひそひそ柿の葉落としゆく月夜」**が、門下の高木和蕾によって松山市喜与町の三宝寺に建てられ、除幕式は同十一月二十六日に行われた。



● **朱燐洞宅・三宝寺・高橋一洵宅を探しましょう。**
（三宝寺には朱燐洞の句碑があります。）

自由律俳句の灯をかかげ
若くして逝った天才俳人 **野村 朱燐洞**

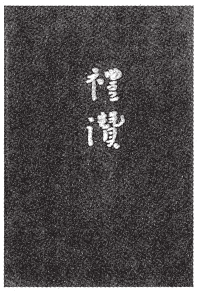
Shurindou Nomura

四、野村朱燐洞遺稿句集

松山は俳句の町である。いたる所に句碑があり、子規、鳴雪、碧梧桐、虚子、極堂等、多くの俳人を輩出している。

ところが野村朱燐洞は、子規より十歳若く二十六歳で亡くなったために、一部の人以外には知られていないのである。

それで今回は、朱燐洞の俳句の師である「層雲」の主催者荻原井泉水がまとめた朱燐洞の遺稿句集「禮讃」の序文を引用して紹介したいと思う。



井泉水が刊行した
「禮讃」の表紙
（大正８．５刊）

① 私が雑誌「層雲」を以て新しい俳句の道の開拓を始めたのは、今から八年以前である。其頃、野村朱燐洞君は僅か十九歳の年少を以て初めて我我の道に参じたのであった。私は、当時伊予の松山から句を寄せて来る此の少年を、初めはただ熱心な人だと思った。そうして其の進み方に注意している中に、この人の純篤な素質は年年磨かれて来た。上手な作者だというだけでは評し切れない程の深い味が閃いて来た。

② 君は既に若い先達であった。「十六夜吟社」の名の下に同志をあつめ、又、土地の新聞を根據地として四国の俳壇に一つの烽火を挙げ始めた。

③ 君の句には美しく潤うた柔みがあった。又、君の句には淋しく澄んだ明るさがあった。それは夕空の明るさだった。……私は君を頼もしく思っていた。……

或日の電報が俄かの訃音をもたらした時、私は肉親を失うたような悲しみを感じた。

「あゝ、私は君が今後の大きな生長を期待していたのに――――けれども、君が今までに残した作品だけでも不朽の価のあるものだ。

又不朽ならしめねばならぬものである。此の意味で、私は彼の遺稿の出版を資けたのであった。…」

いち早く枯るる草なれば実を結ぶ

という君の句が、君自身を象徴しているようにすら感じられるのである　……

「禮讃」には二二三句が集められ、句集名は習作「禮讃」の次の句からとる。

はるの日の禮讃に或るは鉦打ち
鈴を振り

荻原井泉水

松山七ヶ寺詣り。
前列左から２人目が朱燐洞

五、朱燐洞の墓を尋ねて

旅に出る山頭火

放浪の俳人種田山頭火が松山に来たのは、思慕する野村朱燐洞の墓参りと、「十六夜吟社」復活のためであったと言われている。

ところで、朱燐洞の墓は素鵞校区小坂一丁目の阿扶志共同墓地にあるが、野村家が断絶したために長い間、不明であると言われていた。

その朱燐洞の墓を、やっと見つけて山頭火に知らせたのは藤岡政一氏である。

そして、それを知った山頭火は、その日、「今から墓参りに行く。」と言うのだ。

その日とは、昭和十四年十月五日、夜も九時を過ぎ、空模様も悪く、雨もボツボツ落ちて来る中を、提灯をさげて高橋一洵・藤岡政一両氏の案内で出かける。

そして、山頭火は、朱燐洞の墓を見つけるやいなや、その石塔の頭をなでさすり、いつまでも泣いていたというのである。

ところで、亡き朱燐洞と山頭火の友情のドラマを展開したという阿扶志共同墓地も、朱燐洞の墓もこの素鵞校区に今もなお厳然と残っている。

今後とも、多聞院――阿扶志共同墓地――一草庵、そして三宝寺と結んで、朱燐洞の生きざまを、そして山頭火との友情を、私は子供たちに伝えたい気持ちでいっぱいである。

俳人野村朱燐洞の墓（角柱）
墓正面　先祖代々墓
右側面　野村建之
左側面　昭和五年八月

六、おわりに

十三歳で最愛の母を亡くした朱燐洞は、郡役所の給仕時代に上司から短歌を学び文学青年となる。

そして十七歳頃から俳句を学び当時全国に広がっていた碧梧桐の俳句革新に共鳴し、荻原井泉水の「層雲」によって自由律俳句の理論と実作で天才的実力を発揮する。

しかし、現在は朱燐洞を知る者が少ないので、子規――碧梧桐――虚子――朱燐洞と、松山で生まれた俳句の歴史の研究をしたいものである。